



学会のつながり

加藤大さんからご紹介いただいた加藤大です。先月の産総研の加藤さんが2か月連続で執筆している、もしくは加藤さんのアバターが執筆しているわけでもなく、昭和大の加藤大という別人が執筆しています。漢字で書いた名前は、まったく同じですが、名は「大」と「大」と異なるので、氏名をアルファベットや平仮名で記載すると異なります。前号と今号のエッセイで、二人の加藤大を知って頂ければ、幸いです。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、現在、対面で新しい人と知り合う機会が大きく減っています。会議等もオンラインとなり、議事に沿った議論を行い、それが終わったらオンラインから退出し、日常業務に戻るような状況になっています。対面で会議を行っていた時は、集まった機会を利用して会議の前後に研究等についての意見交換など、議事以外の情報交換も行われ、そのような情報交換が会議よりも重要だったこともあったように感じています。

また、会員の皆様は、年会、討論会、支部や研究懇談会が開催する学術集会に参加し、研究発表をされると思います。本学会は、分析化学というキーワードで、新しい分析法や装置を開発されている方、自然現象などを解明するために各種分析法を利用されている方など、非常に幅広い分野の研究者が集まり、様々な発表が行われるので、私にとっては多くの刺激が得られる、貴重な学会だと感じています。

会場で行われていたころは、会場で旧交を温め、また、研究領域が近い、発表順が連番になった、もしくは知り合いの知り合いなど、いろいろな理由で新しい人と出会う場でした。また、会場の待ち時間に異なった分野の講演を聞き、専門外の分野の研究に出会うきっかけになっていました。そして、そのような新しい人や研究との出会いが、自身の研究の発展に大きく貢献した例が多数あります。

しかし、新型コロナウイルス感染症の広がり、学会はオンライン開催が続き、状況が大きく変化しました。学会等がオンライン開催になると、多忙や海外在住などの理由で聞く機会がなかった研究者の講演をライブで楽しむことができます。また、移動時間がほぼゼロのため、日常の業務を続けているなかで、学会に参加することもできるなど、学会参加の障壁は格段に小さくなっています。しかし、そのためか学会に参加しても、自身の発表を行い、あとは興味深い講演をいくつか拝聴するだけで、分野の異なる研究の発表時間になると日常業務や研究に戻る傾向があるように感じます。そのため、オンライン学会は参加しても、人や研究との新しい出会いが減っているように思います。

オンライン学会が主流になり既に2年経ち、今ではオンラインと対面を組み合わせたハイブリット学会や参加者同士がリアルタイムで議論できる場も提供しているオンライン学会など、ウイズ/ポストコロナ時代に対応した新しい学会の試みが多数行われ、これまでとは違った運営形態の学会への移行が試みられているように感じます。先月の第82回分析化学討論会は、3年ぶりのオンライン開催に加え、口頭発表はストリーミング配信されました。今後も、急速に発展しているオンライン技術も活用することで、人や研究との新しい出会いが起りやすい会議や学会の形ができることを願っております。



3年ぶりに現地開催された会場の案内板

リレーエッセイは、最後に次号の執筆者を紹介することになっています。これまでは、執筆者の知人を紹介する例がほとんどであったと思います。ウイズコロナで、出会いが少なくなっている現状を考え、この執筆が新しい出会いのきっかけになればと考えました。前号の執筆者と知り合った縁は、加藤大という名前でしたので、次号は本学会とかかわることになった入会した時期という縁で執筆者を選びました。私は本学会の会員を30年近く続けており、私と同時期に会員になり、会員番号の近い会員として穂山先生を知りました。穂山先生は、以前からの知り合いの薬学分野の研究者でいらっしゃるのですが、次号の執筆依頼によるまったく新たな出会いではありませんでした。しかし、先生は最近御異動され、新しい職場は私の職場の徒歩圏内です。入会時期以外にも何かの縁があるのかもしれませんが、ぜひ、本エッセイを契機に、今後交流を深めていければと考えています。感染拡大防止の観点で、新しい人と出会う機会が難しい状況が続いていますが、本学会がもたらすいろいろな縁によって、会員同士が連携を深め、皆様の研究や業務等が発展することを願っています。

[昭和大薬学部 加藤^{まさる}大]